

商業美術と建築運動の関係性について—1920-30年の活動—

建設工学専攻
建築史研究

509022-0

指導教員 伊藤洋子教授

おがわたけし
小川武士

序章

0-1 研究背景と意義

1920-30年の11年間には、建築を含めた諸芸術団体の発生と共に「商業美術」というカテゴリーを確立する動きがあった。その動きに同調した建築運動参加者がいた事はまだ知られていない。建築・美術運動体それぞれの活動は、団体間・個人間で少なからずも交流を持ち、その結果一つの成果として商業美術成立に寄与した。

0-2 研究目的

本研究では、1920年代の近代建築運動による明確な功績の一断片として存在した以下の二点を明らかにする。

- ・商業美術確立への貢献
- ・建築が総合芸術であるとした意識の芽生え

0-3 研究方法と構成

建築創案を考案した建築運動団体を中心に、当時の図版や言説を分析し、総合芸術への意識の変化を抽出する。それに伴い同年代に活動していた美術団体との関係性を説いてゆくことで、20年代の後半に行われた商業美術全集の編集メンバーに関連性があることを導きだす。

本稿の構成は、1章で建築運動の発生から研究対象の時代区分設定と商業美術との関わりについて、2章で主要建築団体の説明と美術団体との関わりを整理し、それ等の作品分析を行う。作品の施設用途や建築思想は時代背景の影響性の下のような変化があったのか考察する。そして、3章では運動参加者が残した運動回想記と、当時の運動参加者達にその後近い立場で交流のあった方々のインタビューとを合わせ建築に対する思想の変化と、商業美術へ傾倒した因果関係について考察を行う。

第一章 近代建築運動と商業美術

1-1 日本の近代建築運動とその興り

建築運動とは、本多昭一氏の「近代日本建築運動史」によると「建築界における体制の民主化」である。それは宣言や綱領を定めグループを結成した団体が、体制に立ち向かう構図が発生する。日本初の近代建築運動は、1920年に結成された分離派建築会とされている。当時、佐野利器を中心とする構造派の人々が建築界で大きな力を持っていたことや、実用品としての建築を徹底する考え方から野田俊彦が「建築非芸術論」が発表されていた。その流れに対し分離派は表現と創作態度に重きを置き活動を開始していく。東京帝国大学の学生6名が同人習作展を開始したことからはじまる。それに続く団体として、通信省の下層労働者が集い結成された創宇社建築会があり、分離派とのつながりも深い。

1-2 日本建築運動の第一世代

近代建築運動史は大正の分離派建築会、創宇社建築会などから始まり、ラトール、メテオール、日本インターナショナル建築会などの小グループが発生してゆけど、30年にそれら小グループが集結して「新興建築家聯盟」へと集約される。この団体は約100名の建築家を有する建築運動が始まってから最も大きな団体となったが、中心メンバーに10名程の創宇社メンバーが居たことや当時の社会的風潮が重なり、左翼的団体の弾圧（アカ攻撃）によって解散を余儀なくされる。この事件以後、創宇社建築会は活動停止するなど（リーダー蚊象の渡独も重なる）建築団体の活動は縮小傾向にあることから、日本における建築運動の発生から新興建築家聯盟の解体までを1つの区切りとし、1920-30を本研究の対象とする

1-3 商業美術の興りとその定義

1926年（大正15）年、東京に商業美術家協会が設立され協会名に商業美術という名称が初めて選ばれた。純正美術は表現の芸術、工芸美術は生活の芸術として存在し、目的・手段の芸術として新たなパートを担う為に商業美術が登場した。時代の要求と表現の効果を商業政策上の必要な手段として用いることで、当時から盛んになった産業主義と大衆主義の要求を満たすこと目的とした美術である。

純粋美術及び工芸美術の多くがブルジョア向けの贅沢品（一品制作）たる娯楽の美術であるのに対し、商業美術は印刷・建築・照明・造型にあらゆる文明の形式を利用し、最も多数の人々（大衆の生活）に話しかけようとする芸術である。商業美術の思想の元では、個人の邸宅を飾るような室内装飾の様な個人の専有物となり得る事はない。

1-4 商業美術確立と建築団体の動向

商業美術の確立に差し当て、「現代商業美術全集」（全24冊）が1928～30年の間に刊行された。その際、建築運動団体・美術運動団体の双方からの参加が伺える（表1）。

表1. 現代商業美術全集 建築団体所属寄稿者

	出陣	図案制作
分離派建築会		
石本喜久治	○	10
蔵田周忠		2, 10
創宇社建築会		
岡村蚊象		7, 10
小川光三		7, 9, 10
竹村新太郎		7, 9
渡辺謙		9
梅田謙		7, 10
海老原一郎		9
デ・スタイル		
村山知義		2, 5, 7, 16
大浦周蔵		16, 20
デ・スタイル		
吉田録吉	○	2, 16



図1. 現代商業美術全集

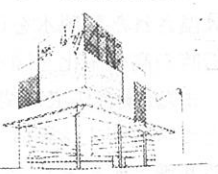


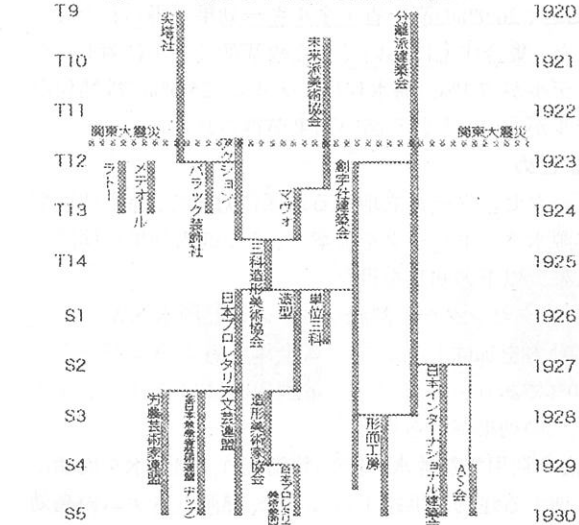
図2. 「果物店の草案」竹村新太郎作

第二章 1920年代の日本建築運動

2-1 建築団体と美術団体の関係性

建築団体を主軸として同年代の団体の相関関係を示す。関東大震災後には、今和次郎の呼びかけにより帝都震災復興展が開催され創宇社など多くの団体が参加した。また、創宇社が単位三科の活動により美術団体と直接的な共同を行っている。

表2. 1920年代における建築・美術団体相関関係図



2-2 建築団体の概要

主要団体のメンバー構成や活動内容・特徴を挙げることで団体間の関係性を示してゆく。

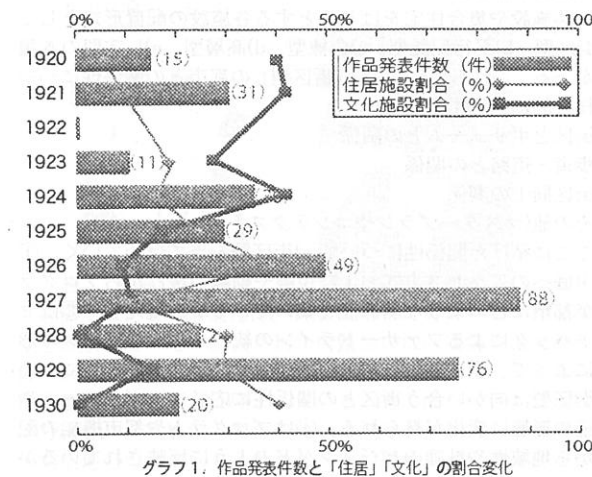
2-3 作品・思想からみる分類

確認できた建築系展覧会の出品題目から、発表作品の施設別の用途変化の傾向を見ると、施設の割合で最も変化が伺えた用途は、文化施設の減少と住宅施設の増大である（グラフ1）。また、後半には商業建築の割合が増加している（表2）。

分離派の出発点が純粋芸術至上主義であったことや、20年代の後半に大衆意識が高まったことからこれらの傾向が伺えると考えられる。

表2. 展覧会出品作品の用途別割合

年代	割合	1位	2位	3位
1920	文化	文化	構成・その他	オフィス・スポーツ・住宅
1921	文化	文化	オフィス	構想・その他
1922	—	—	—	—
1923	文化	文化	オフィス・商業・住宅	インテリア・教育
1924	文化	文化	住宅	構想・その他
1925	構成	構成	住宅	文化・その他
1926	住宅	住宅	構想	文化・その他
1927	構成	構成	その他	商業
1928	住宅	住宅	インテリア	商業
1929	住宅	住宅	商業	文化
1930	住宅	住宅	構想	巨額施設・教育・オフィス・その他



グラフ1. 作品発表件数と「住居」「文化」の割合変化

2-4 世界の運動と日本の運動

創宇社建築会の多彩な活動を、1920年代の周辺にある世界的なデザイン運動の「デスタイル」「ロシアアヴァンギャルド」「セセッション」などと比較する。

創宇社は、他団体と交流を行いながら舞台装置や演劇自体を行うなど、建築に留まり活動を行っていた。これは、建築・絵画・家具など活動領域が非常に広かったデスタイルなどの活動に影響を受けていたと考えられる。

表3. 創宇社とデスタイルの活動領域

創宇社建築会	建築	舞台装置	演劇
デ・スタイル	建築	家具	絵画

第三章 言説による再考

3-1 建築団体参加者の回想録

創宇社に所属していた竹村新太郎氏に縁のある、竹村文庫作成の「竹村文庫だより」（全10号）に収録されている建築運動当事者達による回想記を元に、影響を受けた美術運動や他の団体との関わりを中心に考察を行う。

—後に単位三科って団体ができたんですけど、あれは仲田さんと中原実、歯医者の中実と、玉村北久斗って日本画家の3人が中心です。かなりドイツの新しい美術を紹介した人として仲田さんと石本さんがいたんじゃないかと思っています。—講演会も皆でそこでやりました。その三喜ビルっていうのは、山口文象の設計だと思いますが、仲田定之助さんの持ち物で、1階は商店、2階は事務所、3階はそういうふうに使われていた建物です。もうないでしょうけど。私たちがそこを使った後の時期に川喜田煉七郎という人がそこで工芸学院とかいう一種の学校みたいなやつを運営して、ご当人はバウハウスの日本版を作るといふようなふれこみでやったようですが、私はそれをてんで馬鹿にして悪口書いたりしてます。—

（出典：竹村文庫だより）

3-2 建築団体参加者に関するインタビュー

建築運動に参加していた当事者と近い立場にいた方、若しくは研究者として接見した方を対象にインタビューを行い、建築団体の活動を追う。

インタビュー対象者以下4名

- ・鈴木進 竹村文庫事務局
- ・菊地潤 分離派建築博物館主催 / DOCOMOMO Japan 会員
- ・植田実 建築評論家
- ・伊達美徳 元RIAスタッフ

—竹村（創宇社同人）さんとお話した時に商業建築や商業美術について話は登ったのでしょうか？
僕が話をした時はあまり登らなかったです。
—商業美術全集への寄稿するに至った経緯
こういった活動をしていたという事は、僕は知らなかったですね。創宇社は後半労働者などむけの草案が増えていくけど、商業とのつながりなどはあまり意識はしていなかったかも知れない。分離派などはデザイン運動として存在し、創宇社は社会的な運動としてあったが、商業美術と創宇社が直接的な関係とは言いがたいです。
（抜粋：鈴木進氏インタビュー）

終章

総括

近代建築運動の中核をなした創宇社建築会が商業美術確立の活動に貢献した事実は、日本における建築運動団体と美術運動団体の実際のコラボレーションの典型と言える。それは、日本における建築家が、プロレタリア階級層と、建築を中心としない美術界への進出をするなど、先進性を伴う運動の一断片として存在した。

また、1920年代の建築運動にはデザイン様式の更新としての側面と、労働者としての在り方を問い直す社会的運動としての側面が含まれていたと共に、ブルジョア階級の為にあった建築を、より大衆的に敷衍しようとする動きの一端として商業美術の形成が介在したと考えられる。

参考文献

- 「建築面報」鈴木忠助 建築面報社 1922-1929
- 「現代商業美術全集 1-25」アルス 1928-30
- 「日本建築宣言文集」藤井正一郎 株式会社彰国社 1973
- 「日本近代建築の歴史」村松貞次郎 日本放送出版協会 1977
- 「竹村文庫だより」竹村文庫事務局 1987-1997
- 「大正期新興美術運動の研究」五十殿利治 新日本印刷株式会社 1998
- 「近代日本建築運動史」本多昭一 株式会社ドメス出版 2003
- 「あゝ、尖塔のね。—大正末・昭和初期の都市文化と商業美術—」千葉真智子 岡崎市立美術館 2009